日本の高校生の英語学習価値モデルの作成

○伊藤健彦¹

(¹ 東京大学大学院人文社会系研究科)

キーワード：英語学習価値，期待-価値理論，英語教育

The Model of English Learning Value of Japanese High School Students

Takehiko Ito¹

(¹ Graduate School of Humanities, The University of Tokyo)

Key Words: English Learning Value, Expectancy-Value Theory, English Education

目 的

研究背景

グローバル化が叫ばれる現代日本において，日本人の英語力，さらには英語コミュニケーション力の育成が英語教育において重要視されている。そして日本のような日常的には英語を使用しない環境では，英語学習動機が英語力促進に大きく影響するという主張がされている (Dörnyei, 1990)。そこで本研究では英語学習価値モデルを，特に期待×価値モデルを基に作成することを目的とした。

作成に先立ち，筆者は日本の高校生を対象に自由記述形式で，英語学習の価値についての質的データを得た。これは，高校生が持つ学習動機の実態を広く把握するために行われた。自由記述の結果から，英語学習の「実用」的な価値や「交流」的な価値の側面が見出された。しかし，上記2つの側面以外にも英語学習の多様な側面を主張する日本の大学生の英語学習動機研究 (久保, 1997) を参照すると，この2つでは英語学習価値を網羅しているとは言えない。そこで価値の側面について検討している Reeve (1992) の価値モデルや鹿毛 (1995) の学習動機モデルを参照し，英語学習価値モデルを仮定した。まず，英語学習価値の側面として実用面，交流面，学習内容面，学習環境面，自尊面，の5つを挙げた。さらに自由記述から，例えば英語学習の交流価値においては，「外国人と交流したいから」学ぶという能動的側面と，「外国人に話かけられた時に困らないために」学ぶという受動的側面があり，価値について能動的・受動的な側面があることが想定された。そこで5つの価値それぞれが，能動的(自ら働きかける様子)と受動的(必要に迫られる様子)の2つに区分されると仮定し，以下の10個の価値からなる英語学習価値モデルを仮定した。能動の実用価値：必ず役に立つという考え，受動の実用価値：必要に迫られたら役に立つという考え，能動の交流価値：自ら外国人と交流する姿勢，受動の交流価値：必要に迫られて外国人と交流をする姿勢，能動の学習内容価値：言語への好意的態度，受動の内容価値：言語への義務的態度，能動の学習環境価値：言語を学ぶ環境への好意的態度，受動の学習環境価値：言語を学ぶ環境への義務的態度，能動の自尊価値：言語力への有能感，受動の自尊価値：言語力への義務的態度。

研究目的

仮定した英語学習価値モデルが妥当なものかを高校生を対象にした調査によって確かめ，モデルを作成する。

方 法

研究対象

関東圏内の私立の男子高校に通う341名の生徒であった。

方法

質問紙法によりデータを収集した。

質問紙項目

仮定された英語学習価値モデルを基に作成された英語学習価値20項目。

結 果

英語学習価値尺度の項目で，天井効果・床効果を示した項目が見られなかったため，20項目全てを対象として因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。その結果，6因子構造が見出された。因子負荷量がどの因子においても.29以下であった項目を除いて再度因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った結果，5因子構造であることが分かった。

結果から，新たな学習価値をそれぞれ命名する必要がある。まず第1因子は，項目全てが「交流」に価値を置いていることから「交流価値」とした。第2因子は，項目が「学習内容」に能動的に価値を置いているものが多いことから，「能動的学習内容価値」とした。第3因子は，多くの項目が「自尊」に価値を置いていることから，「自尊価値」とした。第4因子は，「実用」に能動的に価値を置いている項目が多くあることから，「能動の実用価値」とした。第5因子は，「能動的学習環境価値」そのままの項目であることから，「能動的学習環境価値」とした。

考 察

結果から，予備調査や価値に関する先行研究から仮定した英語学習価値の5つの側面は，そのまま5つに分かれることが示された。一方で，学習価値の能動・受動の区別は5つの側面全てに見られるわけではなかった。「交流」や「自尊」の側面において，能動と受動両方の項目が同じ因子としてまとめられていたことから，2つは区別されないことが示された。しかし「実用」「学習内容」「学習環境」については，因子内でそれぞれ能動的な項目が多く，その因子負荷量が大いことから能動的な価値として判断した。今後は，学習価値の能動的・受動的側面の区別についての検証をさらに深め，この区別の妥当性を確かめる必要がある。

本研究を通して日本の高校生の英語学習価値モデルを作成した。本研究は，従来言われてきた2つの第二言語学習動機である，統合的志向性(目標言語社会への統合を目的に言語を学ぶ)と，道具的志向性(就職などの何らかの実利目的を持って言語学ぶ) (Gardner, 1985; Gardner & Lambert, 1972) を外国語環境ではさらに細分化して捉える事の必要性を示していると言える。今後，英語学習価値モデルが日本の高校生の英語学習とどのように関連して英語力促進につながるのかを検討することで，英語教育への示唆を与えることができると考える。

引用文献

- Dörnyei, Z. (1990). Conceptualizing motivation in foreign-language learning. *Language Learning*, **40**, 45-78.
- 鹿毛雅治 (1995). 内発的動機づけと学習意欲の発達 心理学評論, **38**, 146-170.
- Reeve, J. (1992). *Understanding motivation and emotion*. Harcourt Brace College Publishers: New York.